「昭和 23 年の学制改革に遭遇した世代の『思い出の記』（その７）」

《　相馬中学校に入学し相馬高校卒業となる等　》

相 馬 中 学・高 校 の 想 い 出 (※1)

高普４回卒　寺島　泰三 (※2)

我々高卒４回生の大部分は昭和 21 年４月、終戦の翌年に相馬中学校に入校した。朝鮮から引揚げたばかりで誰一人友達のいなかった私は孤独感と不安を抱いたまゝ入校し、１年甲組の一員となった。

席につくや否や隣席に居た目のくりっとした少年が「お前小学校はどこだ。名前は？」と話しかけて来た。その一言が無精に嬉しかったことを今でも忘れない。その友こそ渡辺陸胤 (※3) 君であったが、その友も病に倒れ数年前この世から去った。

入学時は終戦直後の混乱期でもあり、服装は勿論、鞄等もバラバラで下駄ばきが多く、教科書に至っては新聞紙よりも粗悪な紙質のものを自分で製本して使用するといったものもあった。

中学校時代何を学びどのような生活を送っていたかについて記憶は定かでないが只一つ奇妙なことに歴史の試験問題だけは何故か、はっきり覚えている。

即ち１年１学期は「支那の国柄について」であり、２学期は「仏教の伝承について」という論文形式の試験であった。現在の中学１年のテストは果たしてどのようなものであろうか。

通学は間借りしていた駒ケ嶺藤崎の叔父の家から徒歩通学であった。（当時駒ケ嶺駅は未だなかった）約１時間の道のりを数人の先輩同級生と当時禁止されていた鉄道線路の上を歩いて通った。虚弱体質であった私はあの通学で体が丈夫になった気がする。

昭和 22 年教育制度の改革により六・三・三制が導入され、その結果として我々高４回生は昭和 25 年までの４年間後輩がいないという時期が続く。そのせいか同級生の団結は殊更強く感じる。また下級生をいじめるとかしごくと云ったことにも無縁であったといえよう。

高校の３年間は新地からの汽車通学であったが家から駅までの約 40 分は英単語を覚える貴重な時間であった。当時は車両の通行も殆どなく安全だったから出来たことであるが今でも郷里へ帰ってその道を通る時、当時が懐かしく想い出される。

高校時代はバスケット部に所属した。しかし当時はバレー部、サッカー部が強く、人気の野球部の存在もあり、それらの陰でしこしこ練習だけは熱心にやっていた。

インターハイや国体の予選に参加しても概ね準々決勝止まりという程度であり、せめて一度は県内ベスト４になりたいというのが悲願であったが、達成しないまま終わった。

もとより部の予算も乏しく、保革油を塗り過ぎていびつになった只一個の革製のボールを後生大事に使用していた。床の抜けそうな、天井が低くてロングシュートの出来ない武道場跡の体育館こそ、私にとってのメモリアルである。

卒後四十数年還暦を過ぎた現在、時折同級生同志で集う時一番の話題は高校時代の恩師の想い出である。それもほめられたような良き想い出でなく、全てといって良いほど叱られた話、怒鳴られた話、職員室に呼びつけられた話題等々である。

そしてその先生方は姓名ではなく仇名である。失礼ではあるが順不同で羅列させて頂くが、馬、タッペ、グック、あながち、タッポン、ラスカル、ガム、ブラック、とんじ等々懐かしい先生方である。
今考えてみても個性豊かな先生ばかりであった。

最近登校拒否やいじめなど教育の荒廃が話題になるが、我々が指導頂いたような先生の下ではそのようなことには決してならないと確信するものである。

（※１）創立百周年記念誌『相中相高百年史』（1998（平成 10）年７月発行）の「思い出の記」より。
（※２）昭和 27（1952）年卒、福田出身。
（※３）中村出身。

創立百十周年 及び 校歌制定百周年記念式典（※4）

ご　挨　拶（※5）

記念事業実行委員長　寺島　泰三（※6）

本日ここに内外多数のご来賓のご臨席を賜り、在校生の皆さんとともに福島県立相馬高等学校創設百十周年及び校歌制定百周年の記念式典をかくも盛大にお祝い出来ますことは誠に喜ばしく、記念事業実行委員長として心から厚くお礼申し上げます。

相馬高校は、明治31年に福島県第四尋常中学校として第一歩を踏み出してから、福島県立相馬中学校時代を経て現在に至っており、さる平成10年には百周年の記念を盛大にお祝いしたのでありました。

それから十年の間に、城下町にふさわしい風格ある校舎への改築や、完全な男女共学制への移行などが行われ、時代に即した変革と進展が図られながら、脈々と歴史と伝統を継承頂いていることはご同慶に耐えないところであります。

また、本年は校歌制定百周年の節目の年に当たります。相馬高校の校歌は県下で最も古く、かつ幾度かの学制改革にもかかわらず、制定以来歌詞を変えることなく歌い継がれていることは感激であり大いに誇りとするところであります。

この記念すべき年に当たり、馬城会、ＰＴＡ、若駒会及び学校関係職員の方々の絶大なるご協力を頂き、記念事業実行委員会を組織して、記念にふさわしい各種事業を企画実行することと致しました。

即ち、本日の記念式典、記念講演、祝賀会を初めとして、この十年間に重点を置いた記念誌の発行、体育館天窓遮光幕の設置、更には記念音楽会や展覧会の実施等であります。

これらの記念事業がいずれも成功裡に大いに盛り上がることを期待するものであります。

改めて記念事業に携われた皆様のご苦労に感謝申し上げますとともに、ご支援賜りました多くの関係者の皆様に対しまして深甚なる謝意を表する次第であります。

ここで在校生の皆さんに一言申し上げたいと思います。

それは、伝統はただ漫然と繋がれば良いというものではありません。伝統は「培う」ものだということです。

私どもの尊敬すべき大先輩で漢学者の鎌田正先生（残念ながら今年の春97歳で亡くなられました）が生涯をかけて編纂された辞書には「培う」について「草木の根に土をかけて養い育てる」と記述されています。

どうか皆さん、この相馬高校に籍を置いていることを誇りとし、校訓である「至誠」の精神と「文武両道」の気風を受け継ぎ、しっかりと伝統を培ってください。

我が相馬高校が、これからも百五十年、いや二百年と伝統を維持して充実発展することを祈念し、重ねて本日ご参集賜りました皆様はじめご支援頂いております多くの方々にお礼申し上げますとともに、今後とも更なるご協力、ご支援をお願いしましてご挨拶と致します。

（※4）2008（平成20）年9月27日（土）13:00～　本校体育館

（※5）創立110周年記念誌「紅の旗」（2009年1月発行）第1ページより転記

（※6）第9代 馬城会長

（ 転記&※　村山 ）